

私の源「外科学と農業」

清水 公裕

令和元年8月18日に信州大学医学部外科学教室・呼吸器外科学分野・教授および信州大学呼吸器センター副センター長を拝命致しました。私は、平成5年に群馬大学医学部を卒業し、群馬大学第二外科に入局。その後、大学、関連病院、国立がんセンター研究所および国立がんセンター東病院で呼吸器外科の研鑽を積み、信州大学に着任いたしました。信州大学としては初代の呼吸器外科教室の教授であり、その責任の重さに身の引き締まる思いですが、長野県の呼吸器外科医療の発展のために尽力するつもりです。今回巻頭言を執筆する機会をいただきましたので、拙文ではございますが、私の源という題で書かせていただきました。

私は、松本からさほど遠くは無い山梨県山梨市という日本有数の桃とブドウの生産地で生まれました。故郷を離れ早三十数年が経とうとしていますが、群馬大学に在籍していた昨年までは、5月から10月の桃・ブドウの最盛期には月に1度里帰りして、実家の農家の手伝いをしていました。両親は共働きの教員で、山梨県に多い桃とブドウの兼業農家でしたので必然的に人手が足りず、子供の頃から農業に携わり、現在でもそれが継続しているといったところです。

私自身、若い頃から、ごく自然に桃・ブドウの栽培に携わってきましたので果物が実るということが至極当然で、その素晴らしい自然の妙に気がついたのは40歳も半ば過ぎてからです。桃・ブドウともに、原材料は「土壌、空気、水、日光」です。これだけの原材料から、形はもちろん、香りや味、食感までが違う様々な品種が出来ます。収穫までの農作業が如何に大変で手間暇がかかっているかということ差し引いても、手に取り眺め味わってみると、果実は、神が与えたもう最高の芸術作品であり、それらを育む自然の素晴らしさに感動を禁じ得ません。

先日、いつものように仕事をしている最中、ふと隣畑の桃の木を見ると、枝に小さく熟した桃が無数・無秩序に放置されていることに気が付きました。父に、どうしたのかと聞くと「畑の持ち主が病気になる農業を続けることが出来なくなった」という話でした。桃の栽培は、桃の花をある一定の数まで減らす「摘花」という作業から始まります。小さく実が成長すると一本の枝に一定の個数まで実を摘み減らし、その後袋をかけ、最後には袋を剥がし、日光を当て収穫するというのが通常の工程です。この工程が、自然に行われているのが、桃畑風景です。したがって、たまにしか農業に携わらない私は、これまでに、放置され朽ち果てていく桃畑の姿を目にしたことはありませんでした。しかし、実際に放置された桃畑を目にすると、「なるほど、こうなるのか」と生物学的な興味が湧く反面、実にもの悲し

い気持ちになりました。その時に父から聞かされた「栽培が放棄され人の手が入らない桃やブドウの原木は2-3年で枯れはてて、畑が駄目になってしまう」という話は、今に至っても心に染みこんでいます。考えて見れば、自然に自生した野生の桃やブドウは決してそんな「やわ」ではありません。しかし、現代の桃やブドウは、見事な果実を得るために人工的に交配・品種改良され、自然の摂理に反して人が作り出したものです。ですから、その分、人の手を入れなければすぐに枯れてしまうような定めになってしまったのでしょうか。

この話を私が専門とする医学に準えてみますと、まさに我々が行っている医療、特に外科手術というのは、ある意味自然の摂理に最も反する行為だと言えます。つい100~200年前までは、人類は「がん」という存在も知らずに、また知ったとしても、なす術も無く寿命という形で人生の最後を迎えていました。しかし、今は、「がん」であっても早期に発見し、内視鏡などを利用して手術すれば、痛みも、体への負担も少なく、元気に社会復帰することが可能となりました。これはまさに、我々人類が長い歳月を経て手に入れた文明の果実と言えるかもしれません。良い桃やブドウを収穫するためには、長い期間農業を学び、土壌を肥やし、苗木を育て、安定した収穫までには、10年以上の年月がかかります。外科の世界も同じで、医学部を6年間で卒業した後、2年間様々な診療科で研修し、8年目でやっと外科を専攻できるようになります。人によってはさらに4年間大学院で学び、その後外科を専門にしますが、独り立ちするためには、そこから10年のトレーニング期間を必要とします。そして自分の外科医の才能を見極め、このままメスを握り続けるのか、メスを下ろすのかを判断するには、さらに5~10年はかかります。したがって外科医の成熟には、概ね四半世紀が必要になる計算になります。しかし、科学者の能力、職人・芸術家の技術力、パイロットのような緊急時の判断力が必要とされる、いわば幾つもの専門職を融合したような行為を行わなければならない職業ですので、その熟成には農業と同じく長い時間と絶え間ない労力が必要なのは至極当然ともいえます。

この年齢になり、自然との対話が出来た農作業という行為に、幾つもの人生哲学を学ぶようになりました。私が、この農業で経験したエピソードを通して学び得たことは、「外科医は常に最高品質の手術を提供しなければならない。しかし、その技術は桃やブドウを实らせる栽培技術のように、自然の摂理に反した行為でもあるので、外科医が精進を怠り、自らの成長を2-3年放棄すれば簡単に枯れてしまう技術なのかもしれない」ということです。今後は、自分の培った外科技術を丁寧に熟成し、信州大学の仲間・後輩等に伝えるとともに、それを、さらに発展させ、世界中から最新の医療を求めて信州大学に人が集う呼吸器外科教室を作ろうと決意しております。若輩者ではございますが、皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

(信州大学医学部外科学教室 呼吸器外科学分野)